

記憶のいたずら

木村令胡

わたしが生れたとき、その家にはすでに八歳年上の従姉がいた。

この従姉は父の姉の一人娘で父にとってはただ一人の姪なのだが、彼女は生れて間もなく祖母の一方的な意向で両親から引き離され、それ以来この家で育てられた人である。

その経緯をわたしが知ったのはずっと後のことだが、当時彼女の父親には海外赴任の話が内定していて、妻の出産を待つて親子三人で日本を発つことになっているのを周囲には極秘にしていたらしい。思うに、二人きりの我が子等に注ぐ母親の並々ならぬ情愛の濃さを知っていたが故に、伯母夫婦は話を切り出す間を外し心が行き違ったのかも知れない。で、ことが露見するやその怒りは凄まじく、ついにこの仕儀となったということらしい。

考えてみると明治十五年生れの祖母が抱く海外のイメージは、ペリー来航の1853年から二十七年しか経っていない時代に生まれ育った人の世界観であり、しかも大正十一年に野口雨情によって書かれた『赤い靴』の童謡が、年号が昭和に変わってもなお巷でさかんに歌われていたという当時のことである。「異人さんにつれられて行っちゃった♪」だべ？ そんな遠方のおつかねえ所に生れて間もない子を連れて行くという親の気持ちはどう考えても正気の沙汰とは思えねえ。孫が青い目になって帰ってきたらどうすればいいだ！」

と、押し切ったというが、そのときの祖母の顔が目に浮かぶようである。

古いアルバムを繰ると、まるで糞虫のように御包みに埋まった生後間もないと思われるわたしを、小柄な従姉が捧げるように抱きかかえて庭先で撮った写真があるのだが、実は従姉の身体のほとんどが大仰な御包みの陰に隠れてしまっていて、辛うじてその裾辺りからかなり力を入れて踏ん張っているらしい彼女のか細い脚だけが、唐傘のお化けならぬ御包みのお化けの如くによっきり生え出たように写っているというものだ。当時はずいぶんと笑いの種にされた写真だと聞いているが、わたしにとってこの写真は、この家に小さな命がもうすぐ加わることを知ってから待ち侘びてくれていた彼女の気持ちや有頂天振りがそのまま写り込んでいるようで、見る度に笑みが生れるとても大切な宝物なのである。

従姉はわたしと過す時間が何よりも楽しみだったようで、学校が終わると息せき切って帰って来るのだった。夏休みの朝のラジオ体操にも、まるで壊れ物でも扱うようにわたし

の手をとり、あるいは手負ふいしてまで連れて行ってくれたものだ。

その従姉も高等学校を卒業するや和裁を手始めに習い事通いが始まり、いよいよ本人が楽しみにしていた洋裁を習い始めたのは二十歳前後の頃だったかと思う。そしてその夏は、洋裁の先生と生徒さんたち全員で磐梯山南麓にある猪苗代湖の志田浜行きが決まり、水着作りで盛り上がっていた。すでに終戦から四・五年は経つというのに地方ではまだ水着どころか洋服も和服を解いてリフォームするのがほとんどだったから、たとえ手作りでも洋服生地で仕立てた服を着ることが誰ものものであった。生地調達も儘ならぬそんなご時世に父が姪のために奔走して手に入れてきたそれは、眩しいほど鮮やかな色彩がプリントされた戦後生まれの布地であった。従姉は縫製途中の水着を家に持ち帰っては夜遅くまで熱心にミシンを踏んでいた。わたしも日ごとに水着らしくなっていくプロセスが楽しみで、彼女がミシンに向かったとみるや傍らに陣取り、息を詰めてその手元を見守り続けた。

猪苗代湖といえは従姉が小学生高学年でわたしが数えの三つするとき一時帰国していた彼女の両親と行ったあの浜だろうか。今も心から消えないあの夏のあの浜だろうか。空と水の色が渾然一体となって眼前に果てしなく広がる砂浜に立った途端、興奮したわたしは湖に向かって両手を広げ「ああつ、海だ」と大声で叫んで大人たちを失笑させたというが、盆地育ちのわたしにとって海は焦がれても手の届かなかった夢の存在だったのだ。「ここは湖で海とは違うのよ、海の子どもかな。子どもだから海のように自由じゃないんだ」。従姉が砂浜にしゃがみ込んでわたしに耳打ちしたあの言葉もまだ呪文のように耳に残っている。(そうかあ、彼女はあの湖でこの水着を着て魚のように泳ぐのだ)と、そのイメージは日ごとに膨らみ、わたしはまるで自分のことのように胸をときめかして指折り数えてその日を待ちわびていたのだった。

その年の夏も伯母夫婦は帰国していた。祖母とわたしの母は束の間の母と娘の日常をより家族らしく過させたいと配慮してか滞在中はこの家の主婦の座を叔母に委ねて補助役に回っていたようなのだ。ところが伯母は娘が浜へ出立する朝、つまりここ一番という母親の頑張りどころで、こともあろうに寝過ごすという取り返しが付かない失態をしてしまったのである。もうすでに汽車は出てしまった後で、従姉は一人取り残されてしまったのだ。

あんなに頑張った誰よりも素敵な水着を完成させたのに……。わたしは従姉の気持ちを推し量るだけで胸がギシギシと軋み、あまりに切なくてしゃくり上げては泣き続けた。祖母やわたしの両親がこのとき口を挟めない空気は察したが、仲間に置いてきぼりにされた当の本人があまりにけろりとしているのが逆に気がかりで、わたしは彼女の傍を離れるこ

とができなかった。やがて従姉はわたしの顔を覗き込むようにしてぼそりと言った。

「おかしな子。私はちっとも悲しくないのに」

その後わたしは、このときのことをどれだけ思い返してみたか知れない。同じ家で同じ家族の中で育った二人なのに拍子抜けするほど淡々と生きる従姉と、何事にも思い入れが激しく屈託の多いわたしのような者が出来上がってしまったその分かれ道って、二人の来た道のどの辺りにあったのだろうか、と。

それから伯母夫婦は度々帰国し、奪われた親子の空白を埋めようとしてもするかに、我が娘とその娘が片時も手放さないこのわたしを交えての旅行や観劇を重ねた。

わたしが数え年三つのあの夏、このファミリーと初めて行った先はやはり猪苗代湖に間違いないだろう。あの日わたしは外国土産の水着と、果てしなく広がる鮮烈な青色の世界に心を奪われて砂浜を駆け抜け、その勢いのまままっしぐらに水の中に突き進んで行って溺れたのだ。そこにいた誰もが思わず息を飲み我が目を疑がった一瞬の出来事だったというが、そんなアクシデントがあったのにもかかわらずその後もこのファミリーのイベントからわたしが外されることはなかったし、わたしにも同行を渋った覚えはない。思い返すとあの親子ごっこは常に危うかった。それぞれが綱渡りをしているようだった。幼いわたしに出来たのは、従姉のために揺れる綱渡りに馴染んで一緒に揺れていることだけだった。

そんなわたしもようやく高校生になり従姉と大人の付き合いが出来ると勇み立ったその頃には、彼女に持ち込まれた縁談が進行中で、あれよあれよという間にこの盆地から抜け出し東京へ嫁いで行ってしまった。東京タワーが建設される五、六年も前の会津若松からの距離感は絶望的に遠かったし、嫁いだ人との行き来は想いとは別に隔たるばかりであった。その後は、彼女と冠婚葬祭などの折に会う度に「三つ子の魂百まで」の故事を思い知らされることが重なり、それが切なかった。彼女は祖母の死にも自分の両親の臨終にさえ常に淡々とした姿勢を貫き、わたしはというと能登や中国、朝鮮の泣き女も逃げ出すのではと思うほどによく泣いた。が、そんなわたしに一瞥を投げる彼女の瞳の奥に、寂しうに見えない寂しさを身につけてしまった人の困惑を感じとったとき己の迂闊さを恥じた。そしていつからだろう、彼女は「どうしてあなたが泣くの？」と訊くことを忘れている。

三年前に従姉の夫が亡くなった知らせを受けたとき、わたしは他に係累のない従姉に付き添うつもりで急ぎ上京した。彼女の涙をわたしがみたのはあのときが初めてだったかもしれない。その涙が誘い水になったのか互いの堅い口がほどけ、二人は幾夜語り明かしただろう。そしてついにわたしは、長い歲月胸につかえていたことを口にしたのだ。

「むかし、洋裁の先生やお仲間たちと浜に行くので水着作りをしたことがあったでしょう？　ところがあの朝、汽車に乗り遅れて行けなかった。それなのに、あのときすこしも騒がずにあっけらかんとしていたのは、寝坊したお母さんを庇いたかったからなのね？」

「違うわ、実はホツとしていたの。覚えているかなあ、あなたが二つか三つの夏に、私の両親と一緒にいった猪苗代湖で私が溺れたときの事を。あれから水が怖いのよ」

「え？　あのとき溺れたのはわたしよ」

「なにを言ってるのよ。あなたはずっと私の母と砂浜で遊んでいたじゃない」

ああ、何ということだ。従姉が溺れて大騒ぎになったのを見た瞬間に幼いわたしの中で何が起きたというのだろう。しかも半世紀も疾うに過ぎたこの歳月をわたしは記憶違いを抱えたまま生きてしまったというのか。聴くところによるとこれを「誤記憶」とか「偽記憶」というそうなのだが、それにしてもわたしの水の底に沈んでいくあのときに見た、助けに集まってきた沢山の裸の脚に取り囲まれた水中の情景はあまりにも鮮明なのだ。あの記憶の全てが膺の記憶だったというのなら、わたしの脳のからくりは一体どうなっているのだろう。わたしは呆然と従姉の顔を見詰め続けた。そしておずおずと思った。(もしかしたら、もしかしたらただ記憶違いを引き摺ってきたのはこの従姉なのかも知れない)と。

(了)